

札打ち考

—ヴィゴツキーの生活的概念と民俗語彙—

A Consideration of *Fuda-uchi* (Placing Votive Slips):

Everyday Concepts by Vygotsky and Folk Term

中 西 裕 二

Yuji NAKANISHI

(日本女子大学大学院人間社会研究科 教授)

要 約

本論は、三十三所観音霊場、四国八十八ヶ所霊場の巡礼を意味する通称である「札打ち」という民俗語彙に関する一考察である。札打ちとは、前述の霊場となっている寺院に参拝し、その寺院の壁や柱に巡礼札を打ちつける行為で、中世には始められていたと考えられる。だが、これらの巡礼が地方に伝播すると、札打ちという名称と行為はそのままであるが、札打ちの内容に変化が生じていることが、日本各地の事例から分かった。札打ちという通称の成立、札打ち習俗の変化について、ヴィゴツキー (L.Vygotsky) の複合的思考／論理的思考、生活的概念／科学的概念という枠組みを用い、札打ちという名称とその変化の考察を試みる。

[Abstract]

This paper is a study of the folk term “*fudauchi*,” a common name for pilgrimages to the 33 sacred temples of Kannon and 88 sacred temples on Shikoku Island. *Fudauchi* refers to the act of visiting the these sacred temples and striking pilgrimage tags on the walls and pillars of the temples, and this form is thought to have been initiated in the Middle Ages in Japan. However, as these pilgrimages spread to other regions, we have learned from examples in various parts of Japan that while the name “*fudauchi*” and the act of *fudauchi* remained the same, the content of the *fudauchi* changed. This paper attempts to examine the formation of the common name *fudauchi* and changes in the custom of *fudauchi* by using Vygotsky’s framework of complex/logical thinking, and of everyday/scientific concept.

はじめに

本稿は、日本の宗教民俗に関する語彙の特徴について、ロシアの認知心理学者、レフ・ヴィゴツキー (1896-1934) の「生活的概念」と「内言」の概念を援用して考察することを目的としている。具体的に考察する宗教民俗は、西国三十三所観音霊場、秩父三十四所観音霊場といった、民衆が行ってきた観音巡礼である。

ヴィゴツキーは、ピアジェ (1896-1980) の思想を批判的に捉えつつ、幼児の発達段階における概念形成の研究を進めた認知心理学者として著名である。ヴィゴツキーは37歳という若さでこの世

を去ったが、彼の死から半世紀以上たった20世紀末頃から、逝去後に出版された『思考と言語』で論じられている「発達の最近接領域」が教育学において再評価されて以降、彼の思想の影響力は現在まで続いていると言える。筆者が専門とする文化人類学では、ヴィトゲンシュタインの思想と構造主義を基礎に独自の象徴論を展開したロドニー・ニーダム(1923-2006)が、民族的概念の特徴として多配列分類(polythetic classification)¹を提唱した際、ヴィゴツキーが提唱した複合的思考、連鎖的複合の考えを援用したことを論文中で繰り返し述べている(Needham 1975)。

ここでヴィゴツキーのこれらの概念を詳述する紙幅は無いが、本論と関係する点のみ簡潔に説明したい。彼は幼児の思考の特徴として、「個々の具体的事物のあいだに実際に存在する客観的結合に基づいて結びつけられたそれらの具体的事物の複合」(ヴィゴツキー 2001: 170)を指摘し、それを「複合的思考」と呼んだ。そしてこの思考法は論理に基づく概念的思考とは根本的に異なり、概念的思考とは連続しない点も指摘した。そして彼は複合的思考／概念的思考の差異を、生活的概念／科学的概念とも言い換え、生活的概念の非体系性を指摘し、そこでは概念という語を用いるものの、体系の欠如により真の概念とは言えない点を強調している(中村 2004: 51-52)。

ヴィゴツキーの理論のもう一つ重要な点は、人間が他者とのコミュニケーションを図るのとは別に、思考を媒介する記号としての言語という側面に注目し、その内的記号としての言葉を内言と呼んだことにある。そしてこの内言の構造的性質として述語主義を指摘する。彼は「書きことばにとっては、完全な主語と述語により構成されることは法則であるが、内言にとってこのような法則となるのは、常に主語を抜き、述語だけから構成される」(ヴィゴツキー 2001: 409)と述べる。

一見、宗教民俗文化研究とは何の接点も無いようなヴィゴツキーの思想だが、彼の指摘した複合的思考／概念的思考、生活的概念／科学的概念の差異、そして内言の考え方は、宗教民俗文化を深く思考する端緒を与えてくれる。それは、この差異が民俗宗教／普遍宗教²の差異と類似していることにある。

例として、我々の生活の中に根付く日本の宗教文化について考えてみよう。日本で宗教的な概念や行為を示す言葉には、普遍宗教である仏教由来の言葉が圧倒的に多く、中にはそれが日常的な慣用句になっている例を多くみることができる。例えば、極楽と地獄は仏教に由来する他界の概念であるが、それに代わる日常的な非仏教的な言葉は見当たらない。しいてあげれば、この世(現世)の対立項と言える「あの世」であろうか。ただ、極楽・地獄とあの世には大きな違いがある。前者は、仏教という宗教体系にある論理的概念であるのに対し、後者には体系は存在せず、そこにあるのはこの世と違う世界という意義だけであり、ここ／あそこという日常的な用語の転用であり、そこには宗教的体系の世界はない。この例から、我々は日常的世界における生活的概念・複合的思考で宗教世界を理解しようとしていることがわかる。仏教が概念的思考の産物であるのに対し、我々の宗教的世界観は、概念的思考の産物を援用してはいるが、複合的思考に基づくような生活的概念に満ちあふれているのである。我々が、宗教的文脈が脱落した形で地獄、極楽という言葉を実際に使用しているのは、論理的概念を生活的概念として使用する例とも言える。

私のフィールドワークの経験で言えば、かつて現地調査を行った新潟県佐渡島では、民間シャーマンをアリガタヤ、ドンドコヤと称していた。『日本国語大辞典 精選版』によれば、アリガタヤ(有難屋)とは「むやみに神仏をありがたがって、深く信仰する人。通常、門徒宗(真宗)の信

者をさしていった」とあり、初出として1766年出版の浮世草子が挙げられていることから（小学館国語辞典編集部編 2006:194）、江戸期には、シャーマンのような存在をアリガタヤと称す言い方があり、佐渡の呼称はこの影響かもしれない。ドンドコヤとは、彼／彼女らが祈祷儀礼を行う際に太鼓を叩くことから、その太鼓の音「どんどこ」に由来すると考えられる。この名称には、もちろん体系と呼ぶべき型はなく、ただそのシャーマンの特徴的行為などが、彼／彼女たちを指す名称になっているのである。日本におけるシャーマンの通称である「拝み屋」も、全く同様な論理で説明できる。

また、日本民俗学では良く知られたオコナイという新春の行事はさらに示唆的である。オコナイは、仏教の年頭儀礼である修正会³が民俗化した行事と考えられている（福田アジオ・宮田登編 1983:166）。良く知られた修正会としては、東大寺で旧暦一月に行われる修正会、それに続く旧暦二月に行われる修二会（別名「お水取り」）があるが、修正会とは前年の罪を仏に懺悔する悔過法会^{けかほう}という行であり、東大寺の場合、二月堂で祀られる観音菩薩に対する観音悔過法会^{きよう}となっている。これが、村の寺社の行事として民俗化されると、オコナイと呼ばれることになる（滋賀県でこの名称が多いことが知られている）。修正会が仏教という宗教体系の中で行われる「行」であるのに対し、これが民俗化し仏教的文脈が脱落した行事がオコナイなのである。この、オコナイという名称は極めて興味深い。この言葉が、「おこなう」という動詞に由来することは間違い無いと思われ、修正会という「行」を話し言葉に置き換えただけなのかもしれない。ただそこには、体系化されたオコナイという概念はなく、各村落で行事内容は違いが生じる。オコナイとはこのような儀礼であるという概念がまずあり、それを規定する要素はこれこれだ、という関係性は存在しない。修正会になぞらえた行事をオコナイと称しているのであり、オコナイに先行する独自の概念は存在しないのである。これは、ヴィゴツキーの言う内言に非常に近い用語と言えらるだろう。オコナイを取って英語に訳すとしたら、動詞と名詞双方の意味をもつ *practice*（実践する／実践）が適当ではないだろうか。ただ、誰が何を目的に「おこなう」のかといった主語と目的語は欠落したままである。

本論で取り上げる三十三所観音巡礼、また四国の弘法大師ゆかりの寺院をめぐる四国八十八ヶ所巡礼などでは、巡拝する寺院は「札所」「札所寺院」と呼ばれ、その寺名とともに番号が付き通称名のようにになっている。例えば「西国三十三所観音巡礼 第一番札所 那智山青岸渡寺」といった具合である。そして、かつては西国三十三所観音霊場の巡礼者は、巡礼時に札所となる寺院の観音堂などの壁や柱に釘で木札を打ちつける「札打ち」をしていた。従ってこれらの巡礼は通称「札打ち」と呼ばれることになる⁴。

しかし、札所という言葉は仏教において何も規定されておらず、札を寺院に打ちつける行為も仏教にはない参拝方法なのである。実際、西国三十三所観音霊場の一つ、大阪府の中山寺の16世紀と伝えられる記録では、札を堂宇に打つのを控えて欲しいという寺院側の要望が見て取れる（稲城 1990: 174-175）。つまり札打ちとは、巡礼という宗教行為にはそもそも無かった、あるは巡礼の本質的行為ではない行為であったが、それが巡礼の俗称となり、民衆による「仏教的」な行為となっているのである。

ここで一旦、仏教における巡礼の定義を見てみよう。中村元が著した『広説佛教語大辞典 縮刷版』の巡礼の項（p.823）を簡潔にまとめると、以下のようになる。

- ① 順礼とも書く。仏・菩薩・祖師などのゆかりの霊場をめぐって参拝することで、すでに原始仏教聖典の中で勧められていた。後代には、さらにゆかりの地、仏跡や仏弟子のゆかりの地を巡拝した。
- ② 日本では平安中期ごろから観音信仰とともに、諸国の観音霊場の巡拝が始まり、西国三十三所観音が定められ、その他それぞれの信仰から種々の霊場が設けられるようになった（例えば四国八十八ヶ所）。
- ③ また巡拝する信者をも巡礼と称し、白衣を着け、笈摺をかけ、詠歌を唱え、霊場札所に納経したり、巡礼札をはるのを例とした。

この中村の説明から分かるように、日本の巡礼における札打ちは、巡礼という行為を構成する要素の一つであり、かつ前述の辞典に札打ちという項目は無いことから、札打ちという名称は巡礼から派生し、いつの間にか巡礼そのものを指す通称になったと言えよう。正確に言えば、札打ちは仏教的な慣習というより、本来仏教とは関係の無い、民間信仰的な習俗と言えるのである。

本論では、この札打ち習俗の事例を取り上げ、その内容について考察を試みるものである。だが、観音霊場札所を回り、巡礼札を打ち付ける行為以外にも、日本には多くの札打ち習俗が存在しているのである。取りあえずは観音霊場の札所巡礼から始め、日本各地の札打ち習俗を見ていきながら、冒頭で述べたヴィゴツキーの理論を援用しこの語彙とその内容について考察を進めてみよう。

I. 観音霊場巡礼と札打ち

6世紀の、日本への仏教伝来以来、観音菩薩（観世音菩薩）は衆生を救済し現世利益をもたらす仏として人々の信仰を集めたが、平安時代の半ばごろから六観音の信仰が登場する。これは、人々を六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天）の輪廻から救う（六道ろくどうぼくく拔苦）のが六観音であり、それへの信仰が興隆した。

この後、平安時代後期に登場するのが三十三所観音霊場への巡礼である。これは、法華経の普門品にある、観音は33回姿形を変え人々を救済するという内容を元に、33の観音を巡礼して回することで観音の功德と救済を得ようとする信仰である。この33の巡礼寺院がどこかは11世紀末～12世紀にはだいたい確定していたようである（吉井1990）。そして13世紀の半ばには関東地方に板東三十三所観音霊場が成立し、15～16世紀にはこの観音霊場信仰が地方に伝播した（新城1982: 466-479）。その初期の一つであったと思われる埼玉県秩父地方の三十三所観音霊場が、西国、板東と合わせて日本百観音と呼ばれ、新たな巡礼の枠組みが16世紀前半頃に成立したと考えられる（前掲書参照。従って現在、秩父は三十四所観音霊場となっている⁵⁾）。

これらの巡礼で使われた巡礼札がどのようなものか、筆者が何回か現地調査をした秩父の札所寺院を例に見てみよう。現存する、堂宇に打ち付けられた札の大きさは、厚い学術書の背表紙の大きさぐらいが一般的で、板の厚さは薄い。写真1、2は、秩父三十四所観音霊場第二番札所真福寺の本堂側面写真であるが、写真2の中央の巡礼札2枚はともに昭和のものであり、近年でも若干ながら木製の巡礼札が確認できる。また、写真1、2を見ると、木製の千社札、紙製の巡礼札・千社

札なども見られ、時代と共に札の材料や形態が変化してきたことがわかる。

巡礼札への文字表記だが、たいてい文字列が3行あり、右側が巡礼日、左側が巡礼者の住所・氏名、そして中央の行には巡礼地や巡礼目的が書かれている。ちなみに写真2の、中央にある木製の2つの巡礼札の場合、右の札では中央の行には「奉拝西国板東秩父百霊場巡拝同行二人」(西国・板東・秩父は横並びに書かれており、中央が西国、右が板東、左が秩父と書かれている)、左の札では「秩父板東百観世音霊場為現当二世安楽」と書かれている。この表記法は、浅野編(1990)に載せられている巡礼札の写真にも多く見られる形式で、おそらく札所に打たれた巡礼札の一般的な形式なのであろう。もう一点、巡礼札に見られる形式として、札の上部に阿弥陀三尊の種子^{しゅじ}が書かれている点を指摘したい。写真2の中央の2枚の木製巡礼札にはこの種子があり、また写真1の紙製の巡礼札の場合は大日如来の種子が見られる。このように、巡礼札に阿弥陀三尊などの種子が書かれる型は、浅野編(1990)の資料、写真を見ても一般的な形式だったようだ。



写真1 (筆者撮影)



写真2 (筆者撮影)

秩父三十四所観音霊場のうち、第十六番札所の西光寺には、礼堂と呼ばれる小さなお堂がある。このお堂は、巡礼者が木製の巡礼札を打ち付けるためのお堂で、その柱や長押には無数の釘跡がある。礼堂は、秩父には西光寺にのみ現存するというが⁷、その釘穴の多さには圧倒される。また、西国三十三所観音霊場の第二十六番札所の一乗寺(兵庫県加西市)にも、本堂の外陣天井には打ち付けられた巡礼札が現在もそのまま残されている(写真3)。

この三十三所観音霊場巡礼が「札所」と呼ばれた、おそらく最初の霊場であることから、札打ちという行為はこの三十三所観音霊場での参拝方法として確立したと考えることができる。この、現代人には少々荒っぽくかつ強引にも見える参拝方法は、いつ始まったのだろうか。稲城によれば、巡礼札の遺例は十四世紀中頃から残されており、また文献上では、応永二三年(1416)以降の成立とされる『桂川地蔵記』上巻から、この当時巡礼寺院の堂舎に札を打つ習慣があったことがわかる(稲城1990: 173-174)。また、15世紀後半には巡礼札を打つ習慣が、新たに作られた地域巡礼札所の巡礼にも及んでいる(前掲書)。三十三所巡礼に参加した主体は、鎌倉期では行者、僧侶、山伏などであったが、室町中期から一般庶民も参加し始めた(吉井1990:15)ことから、札打ちと



写真3 (筆者撮影)

いう習俗は、三十三所観音巡礼の参加主体が変容するこの時期(14-15世紀)に登場し、その時期に現在の巡礼の原型が出来上がったと考えることができる。

最後に、三十三所観音霊場へ巡礼する目的についてであるが、中世の阿弥陀信仰、浄土信仰とも関係してくる点を指摘したい。阿弥陀三尊の像や絵が示すように、阿弥陀如来は勢至菩薩、観音菩薩を伴っており、その中でも観音菩薩が死者の魂を浄土に届ける役割を担っていることは、平安末～鎌倉期以降に描かれた「阿弥陀三尊来迎図」からわかる。札所寺院に残された巡礼札の、上部に記された種子が阿弥陀三尊であるものが多く見られるが、そこには観音巡礼による先祖(死者)供養という目的があったことが伺える。この先祖供養という目的は、15-16世紀の、古い巡礼札にも見られる。例えば、福島県で発見された明応七年

(1498)の銘がある「木製旧堂山寺観音堂順礼納札」からは、巡礼者が両親の菩提を弔うため三十三所観音巡礼を行ったことがわかる(田村市HP)。また、秩父三十四所観音霊場の札所30番法雲寺には、16世紀半ばの銘が入った6点の巡礼札が残されているが、天文五年(1536)のものには「為二親菩提」、天文十三年(1544)のものには「為後生」と、明らかに菩提を弔う、供養することを目的としたような文言が出てくる(浅野編1990: 242)。

これらから、民衆が三十三所観音霊場の巡礼を行う動機の一つとして、先祖供養・死者供養があったことは確かだろう。秩父三十四所観音霊場の札所4番金昌寺には、18世紀中頃を中心に巡礼者が奉納したと思われる約1,300体の石仏が残されているが、寄進目的が書かれた石仏411体のうち、42%が先祖代々の菩提の弔いであり、その他特定の個人の菩提を弔うための石仏と合わせると、半数以上が死者供養のための石仏である(矢島浩1966: 53-56)。これらの点から、三十三所観音巡礼は先祖の供養が巡礼者の動機となっていたよう考えられる。

II. もう一つの「札打ち」

インターネットで「札打ち」を検索してみると、意外にも多くの「札打ち習俗」とも言える事例を見つけることができる。それらの習俗は、三十三所観音霊場や四国八十八ヶ所霊場の「写し霊場」とも言える霊場の事例もあるが、これらの巡礼とは関係もないものもある。だがそれらの札打ちは、ほとんどが亡くなった近親者、先祖の供養と関係する。

以下の事例は、GoogleでのWeb検索でヒットし、その検索結果をもとに、その地域の民俗資料を調べた結果である⁸。紙幅の都合上、ここでは秋田市、山陰地方、埼玉県吉見町、福岡県筑紫野市の事例を取り上げる⁹。

1. 秋田市の札打ち習俗

秋田県秋田市には「久保田三十三番観音霊場」がある。同じく秋田市内には「秋田六郡三十三番観音霊場」もあり、札打ちが行われている。現在でも「久保田三十三番観音霊場」の札打ちはWeb

上のブログやHPに多く登場する。例えば秋田市観光案内所のFacebookの、2020年1月17日の報告¹⁰では「令和2年1月16日未明にかけて、知る人ぞ知る「久保田三十三番札所巡礼」・通称「札打ち」に参加しました」とあるように、この巡礼自体が「札打ち」と呼ばれている。その内容については、『秋田市史』(2003: 559)では以下のように記述されている。

菅江真澄『久保田の落穂』の中には「久保田補陀落は西の寺めぐりになずらへて、六軍めぐりそめしに、またなずらへて天和(1681-84)のはじめ、平野屋甚兵衛といふ人巡礼そめ」とあるから、江戸中期には「西国三十三番巡り」や「秋田六郡三十三番巡り」を真似て実施したのだろう。毎年1月15日の夜から翌16日にかけて、3年以内に亡くなった近親者の戒名を木札に墨書し、観音霊場を1番から33番まで巡回し、ふだらく(御詠歌・西国三十三番の御詠歌を代用)を謡いながら、木札を寺院の所定の場所に打ちつける。……現在ではワープロで印刷した紙の札を糊で貼り、画鋏で打ちつけ、足にかえて乗用車で回るのが主流になった。

この秋田の事例は、後述する山陰地方の事例と同じく、この観音巡礼が成立した時期、この巡礼者が何を目的に巡礼していたかが分かる事例として貴重である。この巡礼の目的は故人の供養であるが、僧侶を伴わないことから、法要ではない。民俗化した供養なのである。前章で述べた通り、故人の菩提を弔うために三十三所観音巡礼を行うことが、16世紀以降に多く見られる。秋田市の事例は、その巡礼が地域社会で民俗化し慣習化した例と考えて良いだろう。

2. 山陰地方の札打ち習俗

島根県東部から鳥取県西部は、札打ち習俗が濃厚に残っている地域である。出雲市の札打ちは、『出雲市誌』の年中行事の章の、3月の行事として以下のように記されている。

三日 ……(中略) ……この日が札^{ふだうち}打ち初めて出雲三十三番の観音を巡拝する。袷に浴衣を重ね、菅笠に着呉座¹¹か木綿合羽などで青竹杖をついて歩けば、道々で接待があり、子供達は、「札打つあんメンメがつしやい、メンメがなけらにやゼンゼがつしやい…」とねだったものだが、今では服装も気分もすべて変った。五ヶ寺札といって一日で済ますこともある(出雲市役所編 1951: 866-867)。

出雲地方をはじめ、島根県では札打ちが非常に盛んなようで、小島独観氏の作成によるブログ「珍寺大道場」の「山陰の札打ち習俗：1/島根県」を見ると、札打ちの様子が良く分かるのでお勧めしたい。このように、札打ち習俗のデータは、従来のような、紙媒体による民俗調査報告よりWebでの検索の方が得やすい。札打ちは、一見すると仏教による追善供養に思えるが、仏教側が指導する行事ではなく、かといって札打ちは民俗調査の調査項目にも含まれてない。仏教側は札打ちを仏教行事とは考えず民俗行事と考えるので、当然仏教に関する宗教学的的研究には札打ちは登場しない。実際に行事としては盛んに行われているのに、この行事を位置づける枠組みの問題から、札打ちを調べるには紙媒体よりWebでの検索が有効だというのが筆者の印象である。

鳥根県の札打ちの状況については、松江市の葬儀社である公善社のHPにある「公善社のブログ 十王信仰について」の説明が分かりやすい。そこでは、以下のように記されている。

山陰と一部の地域ではさらに札うちというものがあります。それも追善供養の一種でこちらで生きている遺族の方が四十九日までの間にお寺を回り、札をはっていくというものです。昔は木で打ちつけていたところもあったそうですが、いまでは大体紙が主流になっています。出雲のあたりですと10ヶ寺参りというような呼び名で49日までに7ヶ寺か10ヶ寺回るものになりますが、安来や鳥取のあたりに行きますと100枚くらいの紙を七日七日毎にはりにいかないといけないところもあるそうです。

秋田の事例と同じく、出雲をはじめとした山陰地方でも、札打ちは追善供養として行われている。しかし、秋田の事例では札打ちと三十三所観音霊場の関係性が出てくるものの、出雲ではそれへの言及はあまり見られず、葬儀後の追善供養を構成する儀礼の一つに位置づけられている。そして、札打ちをする対象が地藏菩薩とされる地域もある。松江市の札打ちについて、「しまねタンサック」というWebサイトにある「松江の六地藏さん「札打ち」まるわかり！ 札のダウンロードあります」では、以下のように札打ちが説明されている。

[札うちとは？]

札うちとは、お寺のお地藏さんに親族連れ立って札を順番に貼って歩くことなんです。

[札うちのやり方]

葬儀が終わったら、なるべく早く終わらせましょう。(遅くとも49日までには済ませる)

①お札を準備する

「南無地藏願王菩薩」と書かれた札に、

●亡くなった方の戒名

●参る人の名前

を書いたお札を準備する。(一つのお地藏さんに数枚貼ります)

※このページで【お札のダウンロード】ができます。

②下に記載したお寺へ順番に行く。

③お札を貼る。

お地藏さんにお経を唱え(筆者注：ここでの「お経」とは、地藏菩薩の真言「オン カカカ ビサンマエイ ソワカ」)、用意したお札をお地藏さんの所定の位置に貼り付ける。

このように、この説明には観音巡礼という言葉は消えており、札を貼る対象も地藏菩薩となっている。つまり、この習俗は既に巡礼ではなく、死者の供養のための儀礼なのである。

そして鳥取県西部も、鳥根県に隣接した地域では札打ちが盛んである。米子市加茂川の橋の近くに地藏が多くあるが、その由来は以下の通りである。

加茂川のほとりを歩いていると、必ず目に留まるのが、橋のたもと付近に祀られたお地

蔵さんの姿です。

江戸時代の中ごろ、京の彦祖という宮大工の棟梁が、出雲の日御碕神社の造営を終えての帰途、米子に立ち寄り大工町に住みつき、加茂川で水死した子供を供養するために地蔵を祀ったとされ、その後、加茂川の橋の近くに36か所の巡拝するための地蔵を祀り、お堂を建て屋根を付けたといわれています(米子法人会編2018: 2)。

また、この地蔵に札を打って回ることを「札打ち」と称し、以下のように説明されている。

お地蔵さんのお堂に、「南無阿弥地蔵大菩薩」と「戒名」、「行年」を記した白い札や赤い札が貼ってあります。これは「札打ち」といい、身内に不幸があった時、霊を慰め、無事、浄土にたどり着くことができるようお地蔵さんに祈るため、七日ごとに白札を打ち、お終いの四十九日目に留め札といって赤札を貼り、法要を行うという風習です。加茂川沿いのお地蔵さんや寺町のお寺の六地蔵さんに札を順番に貼って歩く故人の家族や親しかった人たちをよく見かけます。(同上)

境港市でも札打ちが盛んであるが、ここは弘法大師と関係して札打ちがなされるという特徴がある。『境港市史』では以下のように記されている。

お大師さん 弓浜地方の春の年中行事の中で、今なおにぎやかに行われているものに「お大師さん」と呼ばれる弘法大師の札打ちがある。弘法大師の縁日である三月二日に、信者たちが当番の家へ集まって大師像を祀る。そして「南無大師遍照金剛」と書いた札を持って参る人々に、菓子を接待する。時代とともに、旧暦で行う所(中浜・外江地区)と月遅れの四月二日に行う所(境・上道・中野地区)とに分かれてはいるが、例年にぎやかに行われる。

境地区の「新四国札所」創設は、「安政二年(一八五五)当地に弘法大師四国札所を勧請して納札を始め、毎年三月二日巡拝納札者最も多し」(『境港沿革史』)と言われる。近代になっても昭和六年に竹内町の大同寺から始まって境台場跡近くで終わる新四国札所の石仏が安置されており、「お大師さん」信仰は今も盛んである。(境港市(編)1986: 439-440)

上記の事例でも、とくに前段の説明からは巡礼という要素が欠落しており、弘法大師の縁日に札をもって参拝することが札打ちと呼ばれている。

以上のように、山陰地方の札打ちとは観音菩薩、巡礼という概念そのものがない事例があり、祭祀対象は地蔵菩薩で、札打ちという行為は死者供養の一連の儀礼に含まれている。ここに至ると、観音巡礼とはかなりかけ離れた民俗化が進んでいる印象を受ける。

3. 埼玉県吉見町の札打ち

吉見町の、板東三十三所観音霊場第11番札所である岩殿山安楽寺（通称吉見観音）の駐車場の近くにある石仏には、白い札が貼ってある（写真4）。安楽寺住職に尋ねたところ、百地蔵まいりという風習で、吉見町の中でも安楽寺周辺の住民の習慣だと思う、とのことであった。『吉見町史 下巻』には以下のよう



写真4 吉見観音の駐車場近くの石仏（筆者撮影）

吉見町周辺には百地蔵まいりという風習がある。それは、新仏がでた家で亡霊の往生安楽を願って、最初に迎える彼岸中に百体の地蔵におまいりして、「奉納百地蔵尊（戒名）二世安楽也」という納め札を各地蔵ごとに張って歩くならわしである。これは新しい仏は、なかなか居所が定まらず、六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）に迷うことが多いので、六道の救いの主である地蔵に、亡霊が迷わず極楽浄土へ往生できるようにおねがいするわけである。（吉見町町史編さん委員会（編）1979: 815）

ここでは、観音が地蔵に、33という数も100に置き換えられている。そして、この習俗の目的も死者の供養だが、吉見町の場合は亡くなって初めての彼岸で行われている。また、ここでは百体の地蔵菩薩に札を貼っていくとあるが、実際はそれ以外の仏の場合もあり、百枚の札を仏に貼れば良い、というのが現地ですでに話である。

4. 福岡県筑紫野市の札打ち

福岡県筑紫野市の札打ちは、これまで挙げた追善供養の要素が見られない興味深い事例である。筑紫野市教育委員会の報告（筑紫野市教育委員会編1995）によれば以下の通りである。

札打ち

処女会（後の女子青年団）の“札打ち”はムラの人々の注目を集めていたようです。春三月の彼岸ごろ、嫁入り前の年ごろになった娘さんたちが十数人、旧御笠郡（現在の筑紫野・太宰府・大野城市域）内の33カ所の観音霊場を巡拝しました。かすりの着物の下に赤い腰巻を少しのぞかせて、手甲、脚絆、すげ笠に笈摺（紅白のハッピーのようなそでなし）という揃いの装束姿は、青年たちには魅力的だったでしょう。笠には「南無観世音菩薩」「南無大師遍照金剛」や「同行二人」と墨書があり、ご詠歌を唱え、鈴をふりながらの巡礼でした。3泊4日ぐらいいで、親戚や知人の家などを宿にしました。地元は「接待をすると功德を積む」と信じられ、宿になった家や札所では、近くの人々によるお茶やお菓子の接待がありまし

た。また、そこが“嫁選び”の場所になることもあったようです。

この事例では、三十三所観音霊場の巡礼という、札打ちの原義とも言える行為はあるが、結婚前の女性による巡礼ということで、信仰というより結婚にスポットが当てられているように見える。最後にある「嫁選びの場所」という記述が、地元の人々にとっての札打ちなのではないだろうか。

Ⅲ. 札打ちとは何なのか

I章で見たように、三十三所観音霊場の巡礼における儀礼的行為の一つとして、札打ちという行為と名称が民衆に広がったことはおそらく間違いない。そして札打ちは、観音霊場をはじめ四国八十八ヶ所巡礼にまで広がり、巡礼行為そのものを指す通称にまでなっている。そしてそれは、地方に伝播するに従い、かなりの変容を遂げることになる。これは、仏教の民俗化、大衆化の一例と言えるかもしれないが、この一言で処理するには現象面、理論面双方に多くの問題が含まれている。本論のまとめとして、これらの点について指摘したい。

(1) 仏教と民俗の関係性

三十三所観音霊場への巡礼は、仏教という枠組みで意味をもつ行為だという点は自明である。だが、仏教という宗教の軸になるのは出家者（僧侶）であり、在家者、つまり民衆は信仰により仏法の加護を受けるというのが基本的枠組みになる。しかしながら三十三所観音霊場への巡礼という枠組みは、出家者が創造した儀礼的行為であるが、出家者が必ずすべき行為ではなく、あくまで観音信仰の一つの形式として創出されたと考えた方が良好だろう。

そもそも33という数は、法華經において観音の功德を説く「普門品」に出てくる、観音が33回姿形を変え衆生救済を行う、という文言に基づいている。しかし、33所の観音を巡礼せよとは「普門品」には書かれていない。三十三所観音霊場は、一種の論理的飛躍とも言える発想により日本で成立した、儀礼的实践と言えるのである。

それゆえ、三十三所観音霊場巡礼は僧侶に課される儀礼的实践とはならず、その主体は仏教者から在家者＝民衆に変化していく。16世紀頃から巡礼札に登場する、故人の浄土への成仏を祈るための観音巡礼は、おそらく阿弥陀三尊に登場する聖観音と関係するが、僧侶の発想かは分からない。平安期以降、天台系寺院では念仏三昧の思想、常行三昧堂での常行三昧の修行実践など、阿弥陀如来への信仰が強くなり、法然のように念仏三昧に基づく思想を中心に据える僧侶も登場する。しかし観音巡礼に関しては、元になる宗教的实践の形式が仏教の体系の中には見られず、三十三所観音巡礼は出家者、あるいは山伏の恣意的な行^{ぎょう}として始まったと言えるだろう。

先に述べた、三十三所観音霊場巡礼を成立させた「論理的飛躍」は、実はⅡ章で述べた、日本各地の札打ちという習俗に通底する考えと言える。Ⅱ章で挙げた札打ちは、33や100という数字が登場し、札打ちをして回る場で祀られる仏は、観音だけでなく地藏もあり、また弘法大師さえある。そして札打ちをする時期も、1月16日、春秋の彼岸、初七日～四十九日など多様である。これは、死者供養の要素として、観音巡礼の要素をその都度組み合わせただけのように見える。

この点は次節でより詳述するとして、ここで仏教と民俗の関係について上記の点を概括したい。三十三所観音霊場や、その後に派生する札打ち習俗は、仏教の民俗化という言葉でまとめることは論理的には無理がある。例えば念仏という行為で考えれば、平安期に仏教内で成立する念

仏三昧の思想が、法然などを通して一般民衆にも広がり、土着化＝民俗化したということは可能である。しかし三十三所観音霊場に関して言えば、仏教には本来存在しなかった儀礼的实践であり、観音への信仰を元に新たに創造された、擬似仏教的な宗教的实践と言えるのである。室町期に成立したと考えられる、花山天皇(968-1008)が西国三十三所観音霊場巡礼を始めたとする起源伝承自体が、三十三所観音霊場巡礼と在家者の関係性をうかがわせる物語となっている¹²。この巡礼は修行を積んだ高僧が始めたのではない。これらから、三十三所観音霊場巡礼は、その成立において民俗的な発想(＝生活的概念)から生じた儀礼的实践と言っても良いであろう。

(2) 札打ちというカテゴリー

札打ちという言葉は、三十三所観音霊場巡礼や、四国八十八ヶ所巡礼のように、寺院に巡礼札を納札して回る宗教的实践を意味している。札打ちは、この種の巡礼で見られる、やや特異な納札方法と言うことができ、それゆえ札所巡礼を示す通称となったのだろう。

だがⅡ章で見たように、札打ちという言葉が含む行為群を見ると、それは極めて多様である。三十三所観音霊場の巡礼は確かに札打ちだが、札打ちという概念が三十三所観音霊場への巡礼を意味する訳ではなく、民俗語彙としてはかなりの広がりを持つことが前章からも理解できる。これは、札打ちという言葉のカテゴリーが、イギリスの文化人類学者、ロドニー・ニーダムが提示した「多配列的 (polythetic)」であることを示している。

ニーダム(1975)は、ヴィゴツキーの複合的思考・連鎖的複合の概念、及びイギリスの言語哲学者ウィトゲンシュタインの家族的類似の概念を元に、新たに多配列分類という概念を提示した。分類は本来、様々な共通属性をもつ存在を一つにまとめる論理的思考であり、動物や植物の分類が典型といえる。動物を例にとれば、人間が分類される哺乳類は、動物分類における脊椎動物の類の一つで、他に鳥類、爬虫類、両生類、魚類に分類されるが、哺乳類を含めこれらの類の動物には椎骨からなる脊椎をもつという共通属性がある。科学の領域で分類は、このように存在する共通属性により一つのカテゴリーが形成される(これを単配列分類と呼んだ)。しかし、この共通属性がないにも関わらず一つのカテゴリーが形成される思考方法が民族分類にはあり、ニーダムはそれを多配列分類と規定した。図で表すと以下ようになる。

	多配列 クラス				単配列 クラス	
	1	2	3	4	5	6
個 体 特 性	A		A	A		
	B	B	B			
	C	C		C		
		D	D	D	F	F
					G	G
					H	H

図1 多配列クラスと単配列クラス(長島 1982 より)

この図1が示す通り、多配列クラスにはどの個体にも共通する特性は無いが、全体として類似する。I章とII章に出てくる札打ちをまとめると、札打ちのカテゴリーはまさに多配列的であると言える。

次に、ニーダムのこの多配列分類の理論的背景の一つである、ヴィゴツキーの複合的思考について触れてみたい。ヴィゴツキーは、児童期から少年期への社会－文化的発達と概念形成の問題を考える際に、概念形成の手段としての言語に注目する（ヴィゴツキー 2022: 165）。そして少年期の思考は、一般の概念的思考とは異なる傾向がある点を指摘し、それを複合的思考と呼んだ。概念的思考には、たがいに論理的に一致する統一したタイプの結合が存在するのに対して、複合的思考の基礎にはしばしばたがいに異なる共通性も持たない多種多様な事実的結合が横たわり、と指摘する（前掲書, p.172）。ニーダムは、この概念的思考／複合的思考を単配列的分類／多配列的分類と読み替えるが、とくにニーダムが目にしたのが、ヴィゴツキーが「複合的思考のもっとも純粋な形態」（前掲書, p.177）と考えた、連鎖的複合というタイプである。複合的思考の基礎には、それを構成する個々の要素の間の抽象的・論理的結合ではなく、具体的・事実的結合が横たわっており（前掲書, p.171）、この連鎖の個々の環を通じて意味が移動するのが連鎖的複合である。

本稿で取り上げた札打ちのカテゴリーには、本来の仏教がもつ抽象的・論理的な概念的思考ではなく、連鎖的複合の特徴が見られる。例えば札打ちをする対象は、観音ばかりでなく地蔵、弘法大師と広がるが、観音と地蔵に関しては、平安時代に始まる六観音信仰、その後に展開された六地蔵信仰のように、個人の霊の供養という意味で入れ替えが可能であったのだろう。また、三十三所観音霊場の札所巡礼では、札打ちの日時は定められてない（定めようがない）が、II章で述べた札打ちの事例では、日本ではしばしば「地獄の釜の蓋が開く日」と言われる1月16日、先祖供養と関係する春秋の彼岸など、儀礼の日が決められている特徴もある。

ヴィゴツキーは連鎖的特徴の特徴として、概念を構成する特徴的要素のヒエラルキー的関係の欠如、構造的欠如を指摘している（前掲書, p.177）。連鎖的複合の結果として形成されるカテゴリー（＝ニーダムの言う多配列的なカテゴリー）は、単配列的なカテゴリーとは異なり、個体あるいは存在の特性がカテゴリーを決定する訳ではないので、ヒエラルキー的関係や中心の欠如は当然と言えよう。札打ちのカテゴリーはまさにそれにあたる。札打ちを構成するカテゴリーにおいて、唯一共通するのは、木札を打ち付ける＝紙の札を貼り付ける、という行為そのものである。ここにおいて、概念を形成する際に必須である抽象化という思考は出て来ない。共通する行為名称そのものが、行為群を包括する名称となっているのである。

(3) 札打ちという名称の特異性

そもそも、なぜ三十三所観音霊場の巡礼は札打ちと呼ばれるのだろうか。この巡礼は何をするのかと言えば、巡礼者の装束をし、札所寺院に行き観音を一連の作法（真言を唱える、御詠歌を詠む、般若心経を唱える、御朱印を書いてもらう、等）で参拝し、巡礼札を寺院の建造物に打ち付け、次の札所寺院へと移動、という行為群から成り立っている。だが、それらの行為をまとめる言葉が、なぜ札打ちと言った巡礼を構成する要素の一つとなっているのだろうか。札打ちは何かと問われ、木札を打ち付けることだという返答があったとすると、これはトートロジーと言える。こ

の問いに関する正確な解答は出せないが、これを考察する端緒として以下の2点について指摘したい。

三十三所観音霊場にせよ四国八十八ヶ所霊場にせよ、その巡礼者はほとんど、何らかの目的をもち巡礼している。それはそれらの寺院に納札する＝札打ちをする巡礼札に書かれている。現存する巡礼札は、おそらく15世紀末以降のものであるが、それらの巡礼札に記された巡礼目的の多くは先祖供養である。これは、巡礼札に「二世安楽」「為菩提」などといった追善供養を示す語が多く記されていることからわかる。なぜ追善供養のため観音霊場を訪れるのか、の点については、ここでは詳述する紙幅がないが、前述した阿弥陀三尊を構成する仏の一つが聖観音だということ、この聖観音は阿弥陀如来のもとに、つまり極楽浄土に死者の魂を送り届ける役割を担う、という解釈から来ているのだろう。

前述した、三十三所観音霊場巡礼での行為群の中で、巡礼の目的と直結する行為は何かと言えば、それが書かれた巡礼札を寺院の建造物に打ち付け、観音に願（故人の魂を浄土に導いてもらう）を届けることである。つまり、札を打ちに行く行為そのものが、この巡礼の本質だと考えた人々が多かったことが考えられる。

この点について、本論の冒頭で述べたヴィゴツキーによる「内言」の議論を援用しながら、札打ちという用語を考えてみたい。ヴィゴツキーは、他者とのコミュニケーションとしての道具としての言語を外言、自己の思考のための言語を内言と呼び、述語主義という用語で内言の特徴を述べている。内言では、主語やそれに関わる概念が消え、最終的には述語のみが残るという。そしてその語の例として、他者には分かりづらい慣用句を挙げている。札打ちという言葉は、この内言の性格を有していると言える。実際のところ、三十三所観音巡礼は、木札を打ちに行く行為であり、それは観音へ願を届けることを意味する。

第Ⅱ章で示した、日本各地の札打ちは、札所巡礼の「写し霊場」とも言えるが、観音霊場を地元に作ったというよりも、札打ちをする場を作ったと言ってよいであろう。そしてそこには、観音の存在や巡礼自体が既に消えてさえいる例もあり、そこに至っては、札打ちは一連の死者儀礼の一つとなったのである。

結びにかえて

本論は三十三所観音霊場巡礼で見られる札打ちから始まり、それが三十三所観音霊場巡礼そのものを指す用語となり、そしてそれが日本中に伝播した事例を元に、札打ちというカテゴリーは何かという点を考察した。最後に、仏教と民俗の関係性について、ヴィゴツキーの論を端緒として再考してみたい。

仏教やキリスト教のカソリックは、聖職者・出家者の宗教であり、彼らを通して、また彼らがいる聖域（教会・寺院）を通して、非聖職者・在家者は聖（神や仏）へとアクセスできる。宗教主体はあくまで宗教者及び彼らの属す組織であり、その宗教思想が記されたテキスト（聖書や仏教経典）へのアクセスは、聖職者・出家者にのみ可能な（可能だった）宗教的行為と言える。つまり、宗教思想や組織が体系化された中に宗教者はいるのである。

それに対して、三十三所観音霊場巡礼には、ルールのような決まりはあるものの（服装、唱え言

など)、この巡礼は仏教という枠内で体系化されているとは言えない。そもそも、この種の巡礼は仏教に位置づけられておらず、不明瞭である。そしてこの巡礼を意味する通称(札打ち)は抽象的な概念ではなく、行為そのものなのである。そうすると三十三所観音霊場の巡礼とは、「仏教という宗教行為」というより、仏教に近いが根本的に仏教とは異なる、生活的概念に基づく「仏教的行為」と言うことが出来るだろう。

ここで、ヴィゴツキーが提示した枠組みである生活概念／科学的概念の区分は、三十三所観音霊場巡礼をする巡礼者と、仏教の僧侶と寺院、その組織体の関係を考える際に有益であると思われる。この概念の差異は、以下の通りである。

……(中略)……生活概念と科学的概念の異なる本性がどのように明らかになるかの解明に移ることにしよう。以上に述べてきたことからわれわれはただちに、あれこれの概念の心理学的本性における差異を完全に決定する中心点を、あらかじめ公式化することできる。この中心をなすのは、体系の有る無しである。体系の外で概念は、それが一定の体系のなかにあるときは違ったしかたで対象と関係する。……(中略)……体系の外にある概念においては、対象そのもののあいだに設けられる結合、すなわち経験的結合のみが可能である。ここから、幼児における行動の論理、印象に基づく混同心性的結合の支配が生まれる。体系とともに、概念と概念との関係、他の諸概念との関係を通したある概念の対象に対する間接的關係が発生する。すなわち、概念の対象に対するまったく異なった関係が発生する。概念の中に、超経験的結合が可能となるのである。(前掲書、p.341。強調点は原文のまま)

上記の文章にある「混同心性的結合」とは、複合的思考の特徴と言える。ヴィゴツキーは、生活的概念は複合的思考に満ちた世界であり、体系がある概念的思考の世界とは異なる点を述べている。つまり、複合的思考と関係する生活的概念／概念的思考の所産である科学的概念という対立項ができる。これは、札打ちをめぐる諸概念／出家者・仏教思想・宗教施設としての寺院といった体系をもつ仏教、という関係に近いように思える。だが、それらの概念は、ヴィゴツキーが指摘する「超経験的な結合」により、新たな宗教的世界や習俗を生み出したと言えるだろう。宗教人類学を必要とする領域とは、まさにこの生活的概念と結びつけられた宗教的世界であり、仏教という高度に概念化された世界観を基盤としている日本の宗教的世界は、宗教人類学による分析を必要としていると言えるだろう。

前章までに考察したように、札打ちという三十三所観音霊場巡礼の通称は、祖先祭祀・死者祭祀の方法として広がり、最終的に「巡礼」という概念が脱落して民俗化したのだろう。これを可能にする思考法は、おそらくヴィゴツキーが指摘した複合的思考、連鎖的複合と思われる。だが、札打ちに関してまだ解決されていない問題が残されている。そもそも、巡礼者はなぜ巡礼札を巡礼寺院に打ちつけたのだろうか。これについては、稿を改めて論じたい。

後注

- ¹ polythetic の訳語は幾つかあるが、ここでは長島（1982）に従い「多配列的」という訳語を使っている。
- ² これは、宗教学における基本的な宗教の類型である。普遍宗教とは、キリスト教、仏教、イスラム教、ヒンドゥー教といった、地域横断的に信仰される宗教を指し、それに対して地域固有の宗教が民俗宗教と呼ばれる。
- ³ 正月に行われる法会。毎年正月に、前の年の悪を正し、その年の吉祥を祈って寺院で修される。その起源は天長四年（827）に、東寺、西寺で七日の薬師法悔過を行ったこと、あるいは768年、称徳天皇の治世に、宮中および東大寺などで悔過法をおこなわせたことともいわれる（中村2010: 800）。
- ⁴ この札を指す用語は、納札、巡礼札など複数あるが、本稿では巡礼札に統一する。
- ⁵ 秩父の観音霊場も、長享二年（1488）の年号がある、「長享番付」（札所32番法性寺蔵）と呼ばれる文書では寺院数は33である。しかし、札所30番法雲寺に残る天文五年（1536）の巡礼札の中に、「西国坂東秩父百ヶ所順札」の文字が見られる。おそらくその頃には、西国・坂東・秩父の観音霊場を巡る「日本百観音」の巡礼が創造され、それに合わせて秩父の札所寺院数が34になったと思われる。
- ⁶ 仏、菩薩の各尊を一字で表示した梵字のこと（中村2010: 795）。
- ⁷ 秩父札所三十四観音霊場 第十六番無量山西光寺のHP参照。
- ⁸ とくに参考になったのは、小嶋独親氏による「珍寺大道場」というWebサイトで、札打ちの現場の写真が多く掲載されている。
- ⁹ これらの地域以外では、茨城県南部～千葉県北部、千葉県の房総半島でも、秋田市や山陰地方と類似した札打ち習俗が見られる。
- ¹⁰ 秋田市観光案内所Facebook, <https://www.facebook.com/743499075777251/posts/2605920646201742/>
- ¹¹ きござ。旅行者や登山者などが、日光・雨露を防ぐために身につけて用いたござ。
- ¹² 花山天皇は19歳で天皇を退位し出家した。彼が西国三十三所観音霊場を創始したのは、彼の出家後となっているため、伝承等では「花山院」という名称で語られる。浅野編（1990: 195-214）にある古文書資料、及び西国三十三所札所会HPを参照。

参考文献

- 秋田市（編）2003『秋田市史 第十六巻 民俗編』秋田市。
- 浅野清（編）1990『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』中央公論美術出版。
- 筑紫野市教育委員会（編）1995「ちくしの散歩50—宝満（彦山）詣りと「札打ち」」筑紫野市教育委員会。
- 福田アジオ・宮田登編 1983『日本民俗学概論』吉川弘文館。
- 稲城信子 1990「第八章 順礼札からみた西国三十三所信仰」『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』（浅野清編），pp.173-186，中央公論美術出版。
- 出雲市役所（編）1951『出雲市誌』出雲市役所。
- 林蕙如 2012『日本における巡礼の成立—中世の三十三所巡礼から見ると—』岡山大学博士学位論文。
- 長島信弘 1982「比較主義者としてのニーダム」『現代思想』10(8): 62-68，青土社。
- 中村元 2010『広説佛教語大辞典 縮刷版』東京書籍。
- 中村和夫 2004『ヴィゴツキー心理学 完全読本』新読書社。
- Needham, Rodney 1975 “Polythetic Classification: Convergence and Consequences”, *Man(N.S.)* 10(3): 349-369.
- 境港市（編）1986『境港市史 下巻』境港市。
- 新城常三 1982『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房。
- 小学館国語辞典編集部編 2006『日本国語大辞典 第1巻』小学館。
- 辻村泰善 1990「第一章 西国三十三所と観音信仰」『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』（浅野清編），pp.7-13，中央公論美術出版。
- ヴィゴツキー，レフ・セミョノヴィチ 2022〔1934〕『新訳版・思考と言語』（柴田義松訳），新読書社。
- 矢島浩 1966『秩父観音霊場研究序説』豊昭学園。
- 米子法人会編 2018『米子法人会会報 みずどり』82号，米子法人会。

吉井敏幸 1990「第二章 西国三十三所の成立と巡礼寺院の庶民化」『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』（浅野清編），pp.14-29，中央公論美術出版。
吉見町町史編さん委員会（編）1979『吉見町史 下巻』木耳社。

参考 URL

（以下の URL の検索日は、全て 2024 年 9 月 19 日である）

秋田市観光案内所 Facebook

<https://www.facebook.com/743499075777251/posts/2605920646201742/>

公善社のブログ 十王信仰について

<https://izumo-kouzensha.co.jp/archives/947>

西国三十三所札所会 H P 西国三十三所巡礼の旅

<https://saikoku33.gr.jp/>

しまねタンサック 松江の六地藏さん「札打ち」まるわかり！札のダウンロードあります

<https://tansacs.org/matsue-fudauchi/>

田村市 H P 「堂山王子神社」令和 3 年 11 月号掲載

https://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/30/bunkazai_douyamaouji.html

秩父札所三十四観音霊場 第十六番無量山西光寺（秩父札所連合会作成）

<https://chichibufudasho.com/16>

珍寺大道場 山陰の札打ち習俗：1/ 島根県

<https://chindera.com/shimane-fudauti/shimane-fudauti.html>

珍寺大道場 山陰の札打ち習俗：2/ 鳥取県

<https://chindera.com/tottori-fudauti/tottori-fudauti.html>